

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 金容敬

本論文は、菱田春草の代表作五点、「寡婦と孤児」(東京藝術大学大学美術館)「拈華微笑」(東京国立博物館)「王昭君」(善宝寺)「落葉」(永青文庫)「黒き猫」(永青文庫)を取り上げ、造形的・文献的分析を加えたうえで、春草の史的位置について考察し、日本近代美術を研究する第一歩としようとするものである。

全五章は、各作品の造形的・文献的考察に当てられる。第一章「寡婦と孤児について」では、その主題が常盤御前と牛若という特定の歴史的人物を想定したものではないかという新知見を示し、第二章「拈華微笑について」では、釈迦と十大弟子の姿勢が、中国元代の(伝)蔡山「十六羅漢図」などを援用していることを論証する。また、第三章「王昭君について」では、彩色没骨の朦朧体がヨーロッパ絵画ではなく、日本絵画の着色画法と中国絵画の水墨画法に則ったものであると指摘しており、明治時代、春草の師の岡倉天心らによって、全く新たに唱道された歴史画を代表する、前三章で扱う作品三点は、旧来の伝統をも巧みに踏まえるものであることを明らかにする。

春草の代表作であるのみならず、日本近代美術史を代表する名品である「落葉」「黒き猫」に関しては、第四章「落葉について」で、その先行作例と考えられてきた「落葉」(滋賀県立美術館)「落葉」(個人蔵)「落葉」(福井県立美術館)「落葉」(茨城県立近代美術館)の諸作が、永青文庫本の高い評価により生じた注文作、すなわち後行作例ではないかとの新説を提唱する。そのうえで、第五章「黒き猫について」で、春草がその最も高い完成度に到達したのは、一貫して画き続けた猫を主題とすることによってであり、ヨーロッパ絵画の理念を性急に取り入れた歴史画の分野においてではない。琳派や中国絵画で永く追求されてきた、花鳥画・畜獣画の分野においてであったことを示す。

以上の考察は、個々の論証については、なお一考の余地があるとはいえ、相応の説得力を有する。ただ、必ずしも歴史画・花鳥画・畜獣画に一貫する春草の伝統主義者としての特質に視点を定めて、議論が進められてはいないのは、惜しまれる。また、各章とも、概説的な記述に相当な紙数を費やしているのも、問題であり、博士論文として、あまり適切ではない。造形的・文献的考察を包含した、より一層の総合的な考察が必要とされよう。

後者の問題点は、しかしながら、これまで困難であった日本統治時代からの韓国近現代美術研究に積極的に取り組もうとする韓国人研究者として、必要かつ不可欠な手続きであろう。また、前者のそれは、日本近代美術の日本人研究者にも認められる問題点でもあるとすれば、日本と韓国の近代美術を一つの視野に収めて、今後の研究を進めてゆこうとする一個の東アジア近代美術研究者にとって、今後の課題として、さらなる考察を展開してゆく可能性と称すべきものであり、一概に本論文の欠陥と看做すのは妥当ではない。以上の点から、本論文は博士(文学)の学位を授与するにふさわしい業績であると認められる。